the 2nd ステージ
社会の隅々までキャンプを届けよう NCAJ
公益社団法人日本キャンプ協会　ビジョン2025

公益社団法人日本キャンプ協会
中期事業計画
「ビジョン2025」

－社会の隅々までキャンプを届けよう－
第２ステージ

P2　Ⅰ．「ビジョン2025」策定にあたり

P3　Ⅱ．概　要

P4　Ⅲ．ビジョン2025の展開

P6　Ⅳ．行動計画
　　－私たちのアクションプラン－

P12　Ⅴ．年次計画と進捗工程スケジュール
　　－私たちの目標－

P15　参考

Ⅰ.「ビジョン2025」策定にあたり

新型コロナウイルス感染症の猛威が世界的に広がり、私たちの日常が、社会活動が、教育活動が、そしてキャンプ活動が大きく揺らぐ事態になり、これまで当たり前であったことがこれまでのように、いつも通りには行われない状況になりました。

「ビジョン2020」の実質スタートにあたる2017（平成29）年から徐々に推進が図られた「ビジョン2020」でしたが、2020（令和2）年から2021（令和3）年の2年余りはまさにコロナ禍の大きな影響を受け、その推進にも大きなブレーキが掛かることとなりました。

しかしながら、キャンプを取り巻く周辺社会には大きな変化が見え、「ソロキャンプ」、「おうちキャンプ」、「ベランピング」、「ワーケーション」といった、新しいキャンプの楽しみ方や展開方法、新しい捉え方をする社会が見えてきたことは、私たちキャンプ協会に関わる多くの人々が「このままキャンプの歩みを止めてはいけない」ことを再認識する大きな機会になりました。

このような背景のなかで策定した「ビジョン2025」は、今から5年前の2016（平成28）年10月に日本キャンプ協会設立50周年の節目に策定した、協会中期事業計画「ビジョン2020」を引き継ぐ後継の中期ビジョンです。

今後5年間の社会状況に対応した「キャンプを推し進める人」、「さまざまに展開されるキャンプ」、そして「キャンプを推進する組織・団体の在り方」の３つの分野について、私たちが思い描く望ましい姿の実現に向け、改めて「使命（ミッション）」の確認と役割を再認識したうえで、その行動計画（アクション）と到達目標（ゴール）を提言するものです。

この先に待ち受けるWithコロナ、Afterコロナ時代にこそ、キャンプの果たす使命は重要であるとの気持ちを込めて、

・「ビジョン2020」から変わらない、変えないこと

・新たな取り組みとして盛り込んだこと

で「ビジョン2025」は構成されています。

47の都道府県協会の皆さま、関係団体の皆さま、全国のキャンプ指導者の皆さま、そしてキャンプを楽しむ愛好者の皆さまと、一緒に手を携えて「社会の隅々までキャンプを届ける」行動の「第2ステージ」を起こしてまいります。

Ⅱ．概　要

■タイトル　公益社団法人日本キャンプ協会　中期事業計画「ビジョン2025」

■テ　ー　マ　社会の隅々までキャンプを届けよう　－第2ステージ－

■ロゴマーク

①

②

■設定期間　5年間＝2021（令和3）年9月～2026（令和8年）3月

コロナ禍により社会情勢が非常に不透明な状況であることから、５年間のビジョンでは変化に対応できないことが想定されます。このため、中間年（2023＜令和5＞年）に、臨機応変な修正・追加等を行います。

■周知（切替）期間　2021（令和3）年4～9月の6か月間

■年次計画

	2020（令和2）	2021（令和3）	2022（令和4）	2023（令和5）	2024（令和6）	2025（令和7）	2026（令和８）
NCAJ年次	54周年	55周年	56周年	57周年	58周年	59周年	60周年
ビジョン2025	策定開始 意見交換	１年目 スタート (上半期)周知 (下半期)発表 モデル始動	２年目 ホップ 本格始動	３年目 実行 & 中間見直し	４年目 ジャンプ 実行	5年目 チャレンジ 最終仕上げ	切替え 後継ビジョン
都道府県協会との		各協会へ周知	事業に反映	本格実施	実行＆見直し	最終仕上げ	周知

Ⅲ.ビジョン2025の展開

１．私たちの思いからアクションプランまで

これまで大切にしてきた“キャンプ活動の歩みを止めない”こと、そしてコロナ禍の2020～2021年上半期の間に“私たちが学んだこと”を「ビジョン2025」に新たに盛り込み、

「ビジョン2025」のテーマを、『社会の隅々までキャンプを届けよう －第２ステージ－』としました。

そして『社会の隅々までキャンプを届ける』ことを進めるために、前回のビジョン同様、3つのアクションプランを継続しつつ発展をさせ、行動計画として定めました。

■アクション①：「人材の育成」

■アクション②：「キャンプ事業の創造と推進」

■アクション③：「組織基盤の強化と自立」

２．ビジョン2025で掲げる5年間の方向性

5年後の「2025（令和6）年」においても、多くの人々が安全に楽しくキャンプができるよう、社会の隅々までキャンプを届けることがビジョンの目標です。

日本のキャンプ活動の歩みを止めないことは、すなわち各地域でのキャンプ活動の歩みを止めないことと考えます。そのために私たちは以下を使命と考えています。

①キャンプを推進する人の育成を止めない

②キャンプ・キャンプ組織・キャンプ人材のつながりを強固にする

③多くの人々が、豊かな自然や身近な日常で、多種多様なキャンプを安全に、楽しく行うことができる状況をつくり出す

日本キャンプ協会のミッションは『野外活動としてのキャンプの普及と振興を図り、国民の心身の健全な発達に寄与する（協会定款第3条）』ことです。

この実現には、5年後も日本キャンプ協会が公益法人として存在することが大きな任務となります。そのためには、公益法人としての「社会に認められる使命・役割」を果たすことが大切です。

この使命・役割を果たすには、公益法人として各地域のキャンプ協会と連携し、「法人運営の安定化＝収支構造の改善・安定化」を進めることが必要です。

そのためには、Withコロナ社会でのキャンプ活動の模索・継続と、Afterコロナ社会に向けた準備・開発・トライアルを続けることが私たちに課された重要な課題であると考えます。

策定されたビジョンの大きな方向・方針を具体的に進めるため、事業戦略は「事業3か年戦略計画」として設定し、より状況に即した推進を図る計画（現：2019～2021年度→次期3か年：2022～2024年度）で重点的な取り組みを行います。

また、短期計画については、各年度の事業計画・収支予算計画で設定し、より即時性を発揮して推進してまいります。

私たち日本キャンプ協会の思いと使命

『Camping for ALL』
－キャンプをより多くの人々に知ってもらい、体験してもらいたい－

「私たちの使命（ミッション）」は（協会定款第3条）
『野外活動としてのキャンプの普及と振興を図り、国民の心身の健全な発達に寄与する』こと

今の社会で求められている、私たちの役割は
「キャンプで人々を、キャンプで人と自然を、キャンプで人と社会を、つなぐ」
「案内人（ガイド）」の役割です

2025年に向かって社会の隅々までキャンプを届けることです

2025年に向けた日本キャンプ協会のビジョン

①私たちは、人と人、人と自然、人と社会をつなぐ**「キャンプの案内人（ガイド）」**を務め、
私たちの**仲間を増やし**ます。

②私たちは「案内人」として**「つながる力」「たのしむ力」「たちむかう力」**を活かした
新しいキャンプの創造に力を尽くします。

③私たちは、キャンプ発展のため、私たち自身の**「組織基盤の強化」**を図り、
都道府県キャンプ協会と**日本キャンプ協会**の**自立**を目指します。

ビジョン推進のため、3つのアクションに取り組みます

アクションプラン１

指導者養成制度を活用した
「キャンプ案内人」の養成や
キャンプのすそ野拡大
を図ります

■CI養成の多角化
■CD養成の強化
■愛好者の拡大

アクションプラン２

「つながる力」「たのしむ力」
「たちむかう力」を実感できる
キャンププランを提案します

■多世代応援
■多チャンネル連携
■社会課題対応
■地域独自色発揮
■ＳＤＧｓ協調

アクションプラン３

社会変化に対応して
私たちの
意識改革・組織基盤の強化を図り
お互いの自立を推進します

■オンライン活用、デジタル推進
■地域・ブロック連携の強化
■各協会の独自色の発揮

Ⅳ. 行動計画　－私たちのアクションプラン－

1.アクションプラン１：人材の育成 －キャンプ案内人の養成－

⑴ キャンプインストラクター養成の多角化 ＜まず入り口として＞

現行の指導者養成制度を活用し、キャンプインストラクター養成を行います。
コロナ禍でオンライン講習による利便性が見だされたことを活かし、開催方法を多角化し、養成を強化します。

【目標】（人数）

	2021年	2022年	2023年	2024年	2025年
養成人数	1,600	1,700	1,800	1,900	2,000
（A）都道府県合計	500	530	560	590	620
（B）課程認定校	900	950	1,000	1,050	1,100
（C）一般課程認定団体	200	220	240	260	280

【その方策】

①養成方法のハイブリッド導入
動画コンテンツの作成、オンライン形式の研修会、テキストのデータ配信

②講習会開催方法の多角化
カルチャー講座等との連携、ブロック連携、キャンプイベントとの同時開催
受講ポイント制、全ての都道府県協会での養成

③課程認定団体の強化
講師陣（D1資格者）の量的アップ

⑵ キャンプディレクター養成の強化 ＜次に進化して＞

社会状況に対応した新しい知識・技術を学ぶ機会を設定し、各地域やキャンプ団体で中核を担う「キャンプディレクター層」の強化と、キャンプインストラクター養成講師のスキルアップを図ります。

【目標】（人数）

	2021年	2022年	2023年	2024年	2025年
Ｄ１新規養成数	35	40	45	50	55
Ｄ１更新人数	1,020	1,030	1,040	1,050	1,060
Ｄ２新規養成数	50	70	90	110	130
Ｄ２更新人数	1,400	1,450	1,500	1,550	1,600

【その方策】

Ｄ２・Ｄ１養成の強化
養成目標人数の設定、実施会場の拡充、推薦制度の活用

Ｄ２・Ｄ１養成方法の多角化
複数実施、オンライン型の内容充実、ブロック連携、他団体資格との互換性

ディレクター層（Ｄ１・Ｄ２）の充実
学びの場の設定、活動場面の充実、インフォメーションセンターとの連携

⑶ 愛好者の拡大 ＜さらに裾野の拡大を＞

コロナ禍で「新たな生活様式」が動き出したことにより、新しいキャンプブームが生まれました。日本キャンプ協会のキャンプインフォメーションセンターは多くのニーズが寄せられており、ここから企業との連携、他団体とのコラボレーション、会員の拡大につなげる絶好の機会が到来したといえます。この機会を活かし、「キャンプをしてみたい」といった愛好者を捉えてキャンプムーブメントを展開し、さらなる裾野の拡大を図ります。

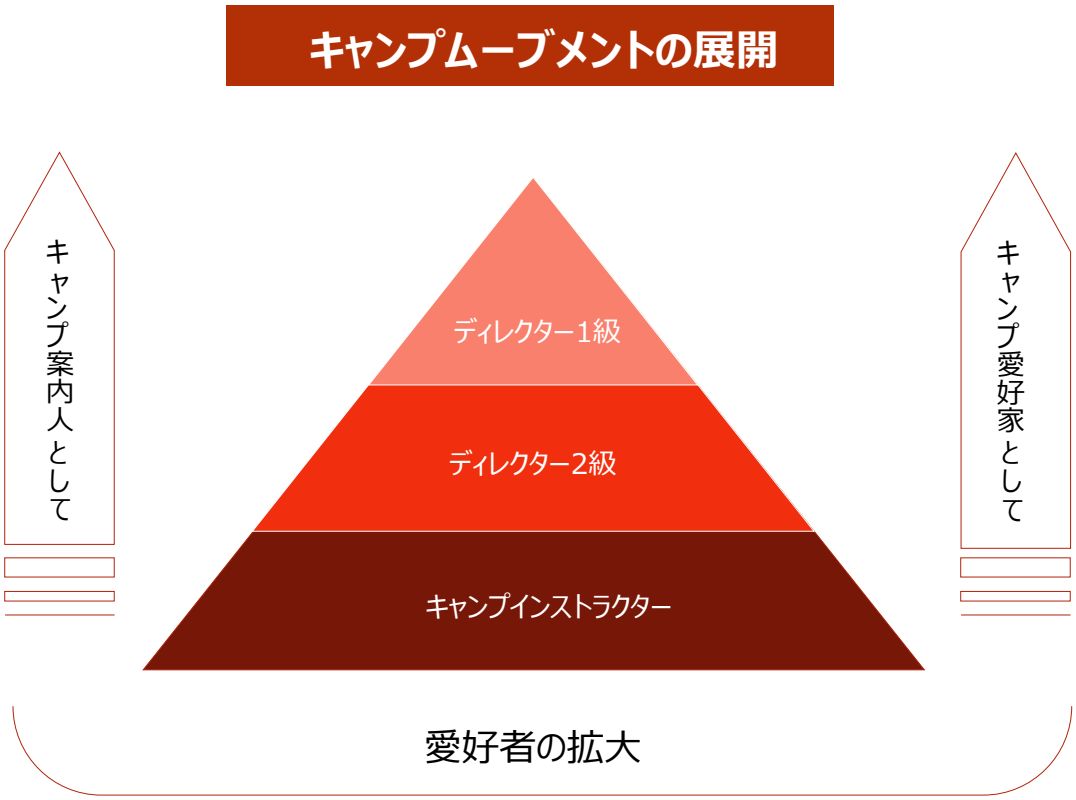
①「キャンプ入門講座」のモデル開発
　（例）カルチャーセンター等からの依頼を受託

②キャンプインフォメーションセンターの有効活用
　（例）オーダーメードキャンプの対応
　（例）コラボレートキャンプの対応

③キャンプムーブメントの展開
　（例）安全にキャンプを行う愛好者を増やす「グッドキャンパーキャンペーン」
　（例）高校生世代へのアプローチ

④現行「キャンプマイスター」の活用
　（例）幅広い対象者、これまでの分野とは異なった対象者への訴求

⑤地域・ブロックの独自色の発揮
　（例）地域独自の会員制度の導入



2.アクションプラン2：キャンプ事業推進 －新しいキャンプの創造－

2020年のコロナ禍で、キャンプの形態はこれまで主流だった「対面・集合型」が感染対策から回避され、新たな集いの方法として「オンライン型」が日々、進化を見せています。

また、これまで「当たり前」「常識」「大前提」だったキャンプの要素が変容し、多様なかたちで顕在化してきたことも、新しいキャンプが創造される追い風として捉えることができます。

私たちはキャンプをさまざまな形態・要素で掛け合わせ、「キャンプ × ○○○○」を生み出していきます。

キャンプに備わっている特性（チカラ）とは

キャンプに備わっている特性（チカラ）を、「ビジョン2025」では次のようにまとめます。これらの“チカラ”をさまざまなキャンプの取り組みに活かし、社会に届けていくアクションを推進します。

■つながるチカラ

・集うことの楽しさ

・新しい技術を習得する楽しさ

・創意工夫する楽しさ

・力を合わせる喜び

■たのしむチカラ

・新しい出会いから広がる輪

・先人たちから受け継ぐ知恵と技術

・異なった考え方（個性）を受け入れる受容性

・家族や仲間を結ぶ絆の深まり

・国地域文化言語を越えて広がる世界

■たちむかうチカラ

・自ら実行することで身につく体験

・畏敬の念を持ちつつ自然と対峙する機会（体験）

・やり方は一つではないことを知る機会

・失敗を恐れず試す行動力

・自分や仲間や自然への気付き

新しいキャンプの創造のために

これらのキャンプの特性を伝えるには、さまざまな方法があります。今まで主流であったキャンプ場などでの対面集合形式もあれば、リモート会議システムを使った伝え方が効果的な場合もあります。SNSでキャンプ情報を見ることも身近なキャンプの楽しみ方といえるかもしれません。

キャンプの特性とさまざまな社会の切り口を掛け合わせることで、社会が求めているキャンプを創り出すことができるはずです。「ビジョン2025」では5つの視点をモデルプランとして提案しています。

多世代応援プラン

若者が行うキャンプはもちろん、ファミリー層やアクティブなシニア層、三世代のキャンプなど、ライフステージや世代に応じた楽しみ方の提案で、さまざまなキャンプが可能になるでしょう。

多チャンネル連携プラン

これまでの学校や青少年団体との連携だけでなく、異業種との連携、異分野との連携、も新たなキャンプ創造に結びつくはずです。

社会課題対応プラン

近年の気候変動から生まれる異常気象に対応した防災・減災への取り組みや、コロナ禍に感染対策を施したキャンプの実施は社会的課題へ対応した取り組みです。

貧困等の社会的な弱者への支援もますます求められるでしょう。

地域独自色発揮プラン

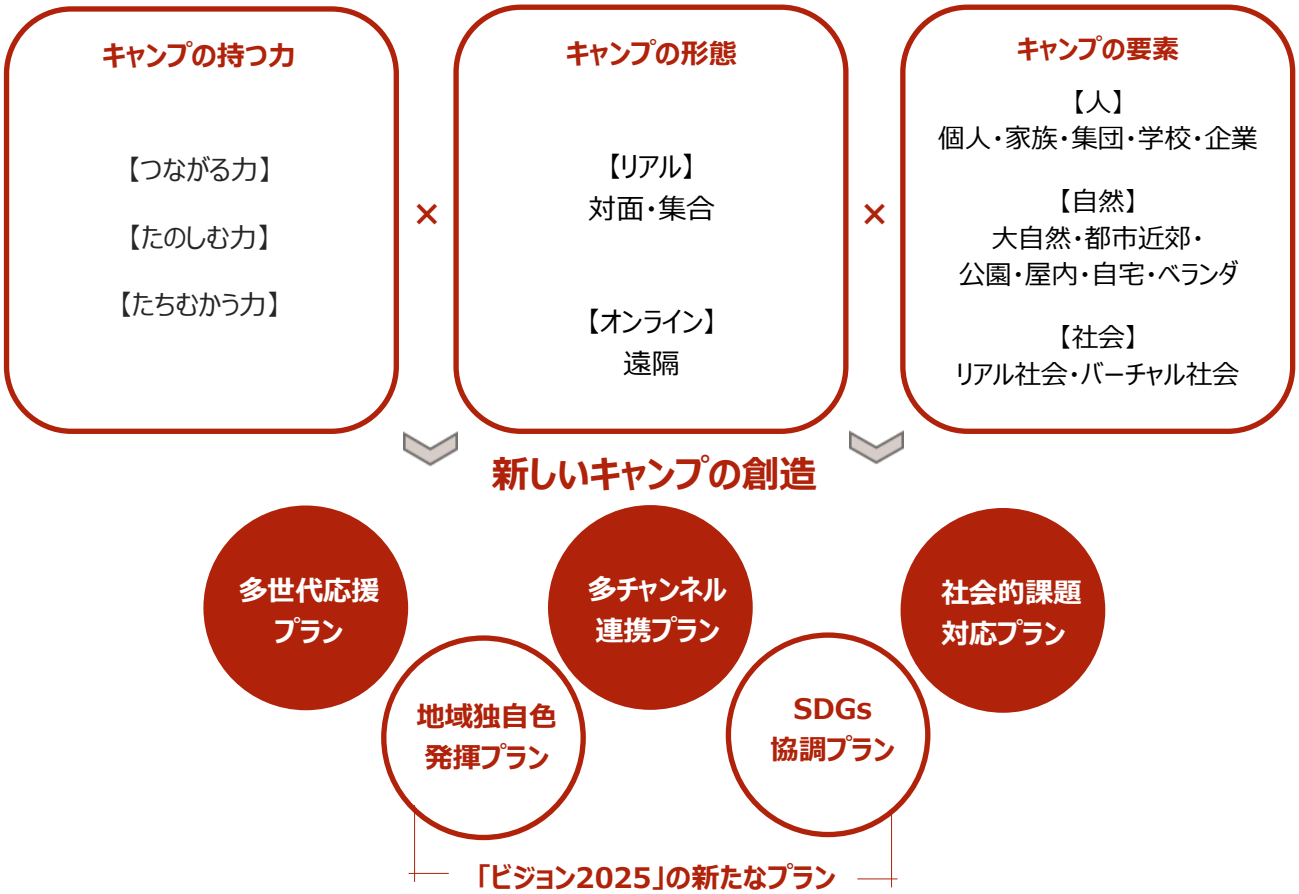
四季があり南北に長い日本ならではの地域の特色を活かしたキャンプは、「地域の独自色」を発揮するチャンスであり、人材の発掘、モノの発掘など「地元再発見」の機会です。

移動制限があるコロナ禍の今、各地の世界文化遺産や日本遺産、ユネスコ文化遺産なども、「Withコロナ・Afterコロナ時代」のキャンプにとって大きなコンテンツではないでしょうか。

SDGs協調プラン

2016年から本格的に動き出した「SDGs（持続可能な開発目標）」17の目標は、これまでキャンプが大切にしてきたこと、そのものと言えるのではないでしょうか。

2030年に向かって、SDGsの理念と協調したキャンプを展開しましょう。



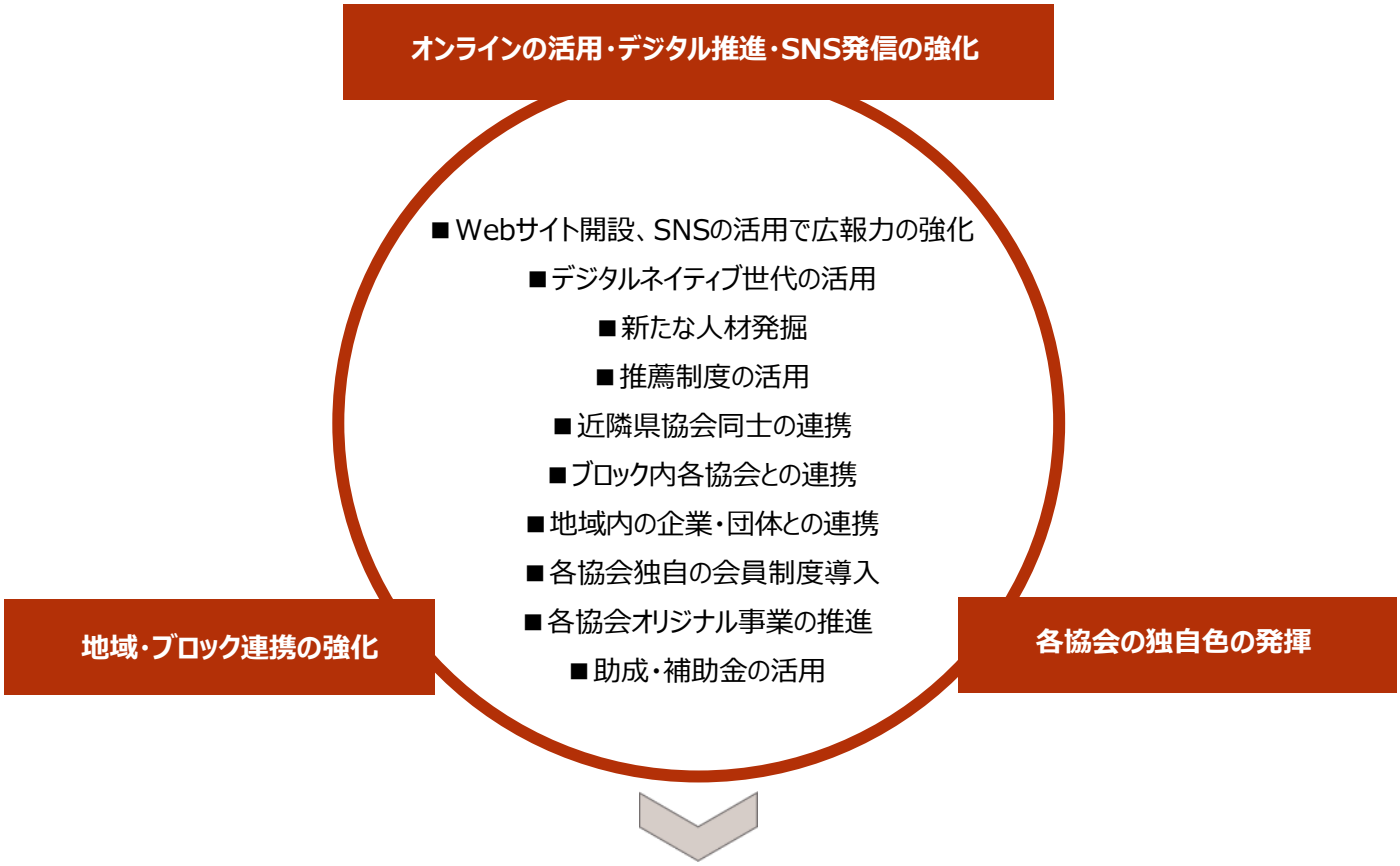
3.アクション3：組織基盤の強化 -都道府県キャンプ協会と日本キャンプ協会の自立-

1966（昭和41）年、日本キャンプ協会が設立され、翌1967（昭和42）年、最初の支部組織として群馬県キャンプ協会が設立されて以降、徐々に地域拠点となる県協会が設立されました。

「ビジョン2020」推進期間の2018（平成30）年、全国47番目となる福井県キャンプ協会が「最も新しい県協会」として設立し、公益法人としての使命遂行に勢いがつきました。

社会状況の変化が激しい今、引き続き「社会の隅々までキャンプを届ける」ため、これまで以上に私たち日本協会と都道府県協会の意識改革に取り組み、組織基盤の強化を図りながらお互いの自立を推進します。

都道府県キャンプ協会と日本キャンプ協会の
意識改革・組織基盤の強化・互いの自立を図る具体的なアクション事例



具体的アクションを実行し、日本協会・各地域の協会・案内人・愛好者が、
それぞれの立場でキャンプを展開

日本キャンプ協会の取り組み

大原則として「普遍に」

１．公益目的事業の着実な実行による公益性の向上

２．協会使命の永続性の確認

３．「ビジョン2025」の“確実な推進と検証“の繰り返し

４．「事業3か年戦略計画」の次期計画の着手

５．野外活動実践の場としての朝霧野外活動センターの今後を検討
（指定管理業務の是非の協議を含む）

現状を見据え「速やかに」

「運営」感覚から「経営」感覚へ、「人・モノ・金・情報」の有効活用

社会状況に応じた協会運営の見直し

適正な執行理事体制の維持

関係団体・賛助団体との関係確立

事務局体制の充実・業務内容の見直しと再構築

各種委員会の設定・改変

タスクチームで即時性を発揮し課題を解決

有効な情報収集と発信

現インフォメーションセンターの有効活用

時代に即して「柔軟に」

社会的認知度の向上

メディア露出を増やす

グッズの活用（例：ステッカー、ワッペン、アプリ等）

著名人・タレントの活用

専門家（医師、法律家、会計士、情報アナリスト等）の活用

他業界・異業種とのコラボレーション

動画の活用

都道府県キャンプ協会の取り組み

「各協会版ビジョン2025」の協議→計画立案→実行→検証

Ⅴ．年次計画と進捗工程スケジュール －私たちの目標－

「ビジョン2020」から「ビジョン2025」への切り替えにあたり、2020年度に次期ビジョンの策定作業、ビジョン総括のための意見交換・説明を行い、検証・総括と策定の作業を進めてまいりました。

そして初年次以降、年間の年次計画を以下の通りスケジューリングし、進捗工程を管理していく計画です。

初年次（2021）：スタート……　切替え、周知、始動期間
（上半期）切替え、周知、現2020総括
（下半期）日本キャンプ協会主導でモデル実施

二年次（2022）：ホップ……　導入実施期間
各協会事業に反映開始

三年次（2023）：ステップ……　本格実施期間＆中間見直し

四年次（2024）：ジャンプ……　実行→定着実施期間

五年次（2025）：チャレンジ……　仕上げ＆総括＆次期策定作業

	2020（令和2）	2021（令和3）	2022（令和4）	2023（令和5）	2024（令和6）	2025（令和7）	2026（令和８）
コロナ関連	コロナ禍 第一波	Withコロナ			Afterコロナ		
NCAJ年次	54周年	55周年	56周年	57周年	58周年	59周年	60周年
ビジョン2020	最終年	（上半期） 切替え・最終総括					
ビジョン2025		１年目 スタート	２年目 ホップ	３年目 ステップ	４年目 ジャンプ	5年目 チャレンジ	切替え
	策定開始 意見交換	(上半期)周知 (下半期)発表 モデル始動	本格始動	実行 ＆ 中間見直し	実行	最終仕上げ	後継ビジョン
都道府県協会とのビジョン連動		各協会へ周知	事業に反映	本格実施	実行＆見直し	最終仕上げ	周知
事業３か年戦略計画	2019年度 開始計画 2年目	3年目	2022年度 開始計画 1年目	2年目	3年目		

単年度での進捗確認 （2021～2025）

■理事会（5月・3月）・社員総会（6月）の機会に、適切に評価・公表。

■執行理事会（毎月）の機会に、進捗把握・方向性確認。

■指導者研修会（10月）の機会に、説明・研修、情報交換・共有。

■ブロック会議（年数回）の機会に、説明・情報共有。

4月	5月	6月	7月	8月	9月
課程認定団体研修会 アクション1の説明	**第1回理事会** 前年度の評価	**社員総会** 評価			
執行理事会	**執行理事会**	**執行理事会**	**執行理事会**	**執行理事会**	**執行理事会**
10月	**11月**	**12月**	**1月**	**2月**	**3月**
指導者研修会 説明・研修 情報交換・共有	**キャンプミーティング イン ジャパン** ビジョン事業の発表				**第2回理事会** 当該年の評価 次年度の設定
執行理事会	**執行理事会**	**執行理事会**	**執行理事会**	**執行理事会**	**執行理事会**

各種委員会での取り組み（2021～2025）

■ビジョン推進委員会
策定作業の後、推進について積極的な呼びかけ、行動を行う。
同時に次の一手も検討し、試行を図る。
キャンプインフォメーションセンターとの連携を図り、相談内容・依頼内容等の積極的な展開を検討し、必要に応じ進める。

■指導者養成委員会
行動計画のうち、アクション1の指導者養成について、積極的に取り組みを行う。

■地域連携委員会
「ビジョン2025」について、各ブロック会議等での周知・説明の機会設定を検討し、認知を高めると同時に、行動を促す。

■CAMPING委員会
年4回発行（春号4月・夏号7月・秋号10月・冬号1月）の誌面を活用し、情報提供を行う。

■安全対策委員会
アクション２「新しいキャンプの創造」での安全意識の向上を図る。

■朝霧運営委員会
ビジョンを具体化する、キャンプ実践の場、先駆的取り組みの場としての機能を発揮する。

※キャンプインフォメーションセンターでの取り組みは各種委員会と同レベルとして、ビジョンに照らし合わせて効果的に前進させる。

日本キャンプ協会事務局の事務作業

■ビジョン推進事業の広報（HP・マンスリーレポート等）と情報収集と発信。

■届け出の書式整備と、目標数値等の把握・管理。

終わりに

この「ビジョン2025」が、公益社団法人として掲げるミッション（使命）である『野外活動としてのキャンプの普及と振興を図り、国民の心身の健全な発達に寄与すること』の歩みを止めない指針になり、そして「社会の隅々までキャンプを届けよう」の実現を目指す行動計画となるよう、各都道府県協会の関係者の皆さま、日本キャンプ協会に関わる多くの方々と連携し、一歩一歩、具体的なアクションを進めてまいります。

ご一読頂き、忌憚のないご意見、ご指摘を頂けましたら幸いです。

2021（令和3）年9月

公益社団法人日本キャンプ協会

ビジョン推進委員会

参 考

現在の社会状況　－私たちの周辺では－

「ビジョン2020」から「ビジョン2025」に切り替えるにあたり、新型コロナウイルス感染症が発生する以前の「これまでの状況」（2016～2019年）と、策定時点の「今の状況」（2020～2021年）に分けて、社会の状況を確認する必要があります。

【これまでの状況（2016～2019年）】「ビジョン2020」施行時

日本の社会状況（少子高齢、都市と地方の地域間格差、働き方改革、生活様式の変化等）を受け、会員数や指導者養成人数は減少傾向が続いておりましたが、社会の中で一定の使命・役割を果たしてきました。

その例として、甚大な自然災害が頻発する状況にあって、「防災や減災キャンプ」への取り組みが増加したほか、「子ども食堂」と連携したキャンプ事業や、婚活とキャンプを掛け合わせた「婚活キャンプ」、地域のさまざまな団体とコラボレーションした「地域創生」のためのキャンプなどが挙げられます。

こうした取り組みがあちこちで見受けられ、アクション2＝キャンプ事業の推進は着実に進んできました。

【今の状況（2020～2021年）】「ビジョン2025」策定時

新型コロナウイルス感染症の出現による、さまざまな社会活動（経済、教育、生活、旅行など）の自粛・制約・変動によって起きた「キャンプを取り巻く周辺の激変」は、「ビジョン2020」で掲げたアクションの推進にも影響を及ぼしました。

指導者養成では資格取得につながる大学・専門学校等での実習が停滞したことで「人材の育成」にストップがかる事態となり、私たちが描く「次のビジョン」も変更を余儀なくされました。

一方、コロナ禍が簡単には収束せず、変異株の出現や感染拡大と時を同じくするように、これまでとは違った視点、方向でのキャンプブームが起こり、キャンプ愛好者の急増を受けて、キャンプ協会が社会から求められる姿も多様になりました。

2015年に国連で採択されたSDGs（持続可能な開発目標）と向き合う機会も多くなり、SDGsの視点は「次のビジョン」には切っても切れないものとなりました。

将来の予測と私たちの考える「キャンプ」

「ビジョン」を切り替える2021年、コロナ禍の真っただ中にある社会状況がこれからどうなっていくのかを考え、「キャンプ」がどのように進んでいくのか、少なくとも2021年から2025年までの5年間は、どうなるかを予想しておくことが必要です。

【コロナ禍の社会状況】

Withコロナ時代なのか、Afterコロナ時代となるのか、いずれにしても「新型コロナとの共存時代」が続くと予想される今後の5年間。また、日本だけでなく世界の国々・地域を含めた「新型コロナとの共存時代」では、人の命が最優先であり、安全・安心な状態が優先されます。

企業・会社での働き方も「時差出勤」、「時短勤務」、「テレワーク」などが推奨され、学校教育においても「オンライン授業」、「課外活動の制限」、「行事の自粛」、「給食は黙食」などもが継続され、最初は違和感のあった「常にマスク姿」、「頻繁な手指消毒」も「新しい生活様式」の中心として定着するでしょう。

このように予想される社会状況の中にあっても、「キャンプ」を通じてさまざまな社会課題に対応し、多くの人々に出会いを提供し、感動や喜びを分かち合う場面を創造し、困難に立ち向かう勇気や希望を育んでいきたいと強く思います。

新たなキャンプブームの特徴

- 大自然より身近な自然
- 多様な楽しみ方
- ゆっくり過ごす
- キャンプ形態の変化
- 大人数から少人数へ
- 遠くへ行かない
- 異業種の参入

日本キャンプ協会と組織キャンプ　－定義について－

設立50周年を迎える2016年に向けて「ビジョン2020」を策定していた2015年春～2016年夏の時期、「『日本キャンプ協会が中心的にとらえるキャンプ』とは何か」という根幹の話が議論され、

◆日本キャンプ協会におけるキャンプの考え方の柱は「組織キャンプ（Organized　Camp）」であり、
◆日本キャンプ協会では、ACA(アジアオセアニアキャンプ連盟)の定義も参考に、組織キャンプを以下のように定義するとしていました。

組織キャンプとは、ある目的を達成するために十分に準備され計画されたプログラムを持ち、野外でのグループ活動や共同生活を通して、キャンパーに対して楽しく創造的でかつ教育的な体験の機会や場を提供するキャンプのことである。また、組織キャンプでは、キャンプに参加する個々のキャンパーの身体的、精神的、社会的成長に寄与するため、信頼できる指導者と良質な自然環境資源が用意される。

(2016　NCAJ)

組織キャンプを定義した2010年代の
キャンプを取り巻く環境

◆2021年から次の将来計画「ビジョン2025」を始動するにあたり、改めて「ビジョン2020」での4年間（2017～2020年）のキャンプを眺めてみると、「2016　NCAJ」で定義された「キャンプ＝組織キャンプ」は現在の価値観から大きく変化しておらず、考え方や語句の修正を余儀なくされるものではないことが分かります。

◆レジャー性の高いキャンプ、冒険色の強いキャンプ、地域特性を反映したキャンプ、個人の趣味・趣向でアレンジされたキャンプなど、「多種多彩なキャンプ」の形態・種類は存在していました。

◆私たちキャンプ協会が推奨する「キャンプ＝組織キャンプ」が学校団体を中心とした教育界で展開される一方、「組織キャンプ」と「多種多彩なキャンプ」は「明確に区別されるもの」という時代から、お互いの要素を取り入れながらボーダレス化し、共存共栄をする時代になっていました。

◆これには、近年に豪華な居住空間・豪華な食事を楽しむキャンプ（グランピング）や、インバウンド（外国からの訪日旅行者・滞在者）向けのキャンプ（観光や世界遺産巡り）、日本文化に触れるキャンプなど、これまでとは異なった価値観・過ごし方でのキャンプの波が、大きなうねりとなって到来していた背景があります。

◆また2010年代は、地球温暖化の影響を受けた異常気象による集中豪雨・高温多湿化・大型化する台風接近・上陸等の要因で、熱中症の多発や土砂災害の発生が「屋外活動は大きなリスクを伴う活動」の風潮を生む等、「キャンプ＝自然の中で過ごすこと」の有効性が脅かされる状況が繰り返されていました。

◆一方、「ビジョン2020」の策定を進めていた時期（2015～2016年）には、国連が2030年度に向けて定めたSDGsの考え方が徐々に各方面で発信・認識され、具体化されるようになり、キャンプ事業の中でも取り入れられるようになっていました。

新型コロナウイルス感染症の登場で
より変化したキャンプの楽しみ方

◆そのような中、2019冬～2020年の世界的な新型コロナウイルス感染症の拡大により多くの生活が制限を受け、これまで「キャンプ」で大切にしていた「日常から移動し、非日常に場面を替えること」、「人々が集まること」、「食事や生活を共にし、会話や活動で、お互いを理解すること」、「協力して、物事に取り組むこと」などが制限され、社会教育としてのキャンプ活動（体験活動の機会提供）も停止状態となってしまいました。

◆その一方で、自粛生活の反動により「リフレッシュ」、「心身の癒し」、「つかの間の楽しみ」、「人間らしさの回復」などの理由・効果から、手軽さと便利さも相まって「キャンプ」に注目が集まり、「（キャンプの行為自体を）楽しむキャンプのブーム」が再び到来し始めました。

これまで求められていた「遠方の雄大なロケーションや未知の世界」から一転し、「地元や近場の自然や文化、歴史」が再発見され、「それぞれが思い思いに過ごすこと」の良さが再認識されています。昨今のキャンプブームには、「キャンプそのものを楽しむ」という「原点回帰」がみられるところに特徴があります。

日本キャンプ協会と
都道府県キャンプ協会の役割

◆日本キャンプ協会は1966年の設立以来、社会的な課題に向き合い、その時代に応じて「人」と「社会」と「自然」を結びつけてきました。野外活動専門の公益法人として「野外活動の普及振興に寄与する」ことを定款に定め、1990年の法人化、2012年の公益認定を経て、これまで途切れることなく野外活動の推進に取り組んできました。

◆2007年には、これまで蓄積してきた人材ネットワークと体験活動のノウハウを活用し、キャンプ・野外活動の実践の場として、静岡県立朝霧野外活動センターの指定管理団体として、静岡県キャンプ協会他と連携して管理運営を担い、2021年現在も継続しています。

◆全国47都道府県のすべてには都道府県キャンプ協会を有し、相互に連携しながら人材養成、キャンプ事業を推進、各地域のキャンプ推進拠点・相談対応拠点として機能しています。

◆日本キャンプ協会には約8,000名 の指導者と約220の各種団体（指導者を養成する協会・青少年団体は約70団体、大学・専門学校は 約110校）の会員がいます。指導者は各都道府県協会にも所属し、各地域の実践を幅広く推進する担い手となっています。

◆これらのキャンプ関係者が担い手となって、コロナ禍でもさまざまな対象者にキャンプを提供しています。その入り口としては、キャンプそのものを楽しむことや、野外での料理や焚火、一人の時間を楽しむキャンプであり、これまで以上に広がりを見せつつあります。

この状況で私たちは、キャンプを「楽しむためのキャンプ」にとどめず、「ためになるキャンプ」に引き上げることが重要で、これまで以上に「ある目的を達成するためによく計画された（Organized）キャンプ」の普及を目指すことが必要であると改めて認識しています。

コロナ禍の2021年9月、「ビジョン」を切り替えるにあたり、公益社団法人日本キャンプ協会の考えるキャンプの柱は「組織キャンプ（Organized Camp）」であることに変わりはない、と実感しています。

2021　NCAJ　が考える「組織キャンプ」とは……

私たちが今考える「キャンプ」とは、これまで大切にしてきた
多くの人々が安全で、楽しく行える「キャンプ」である。

その「キャンプ」とは、
ある目的を達成するために十分に準備・計画されたプログラムを持ち、
野外でのグループ活動や共同生活を通して、
キャンパーに対して楽しく創造的、かつ教育的な体験の機会や場を提供する
「組織的なキャンプ」である。

「組織キャンプ」では、
キャンプに参加する個々のキャンパーの身体的、精神的、社会的成長に寄与するため、
信頼できる指導者と良質な自然環境資源が用意されることが重要である。

（2021　NCAJ）

◆2021以降も数年間は「Withコロナ」での新しい生活様式が続くことが予想されるなか、日本キャンプ協会に与えられた「国民の心身の健全な発達に寄与する」という使命・役割は、いっそう増すものと思われます。

◆日本キャンプ協会は「キャンプ活動」を通じて「国民の心身の健全な発達に寄与する」ことを明確に認識し、「ビジョン2025」においてその使命・役割が果たせる将来展望（ビジョン）を掲げて目標（ゴール）を定め、その工程（プロセスマップ）を示し、『社会の隅々までキャンプを届ける』ことを着実に進めます。

公益社団法人日本キャンプ協会